

「怪物の棲む講堂」



An auditorium where goblins live.

有形文化財、兼松講堂には知られざる価値が眠っていた。

昭和2年に創建されてから76年、学生を迎え、そして送り出す場所として一橋生の心のふるさとであり続けるとともに、学園都市のシンボルとしても国立市民に長く愛されてきた兼松講堂。ロマネスク様式には古今東西の怪物が絡みつき、関東大震災後の東京復興の中、新しい地に錨をおろした大学を見守ってきてくれました。

しかし、空調設備が一切なく、夏は暑く、冬は寒い。そして経年による傷みで壁や屋根が崩れ落ち、危険さえ伴う状態に晒されるようになりました。その兼松講堂は、今まさに改修工事の真っ最中。卒業生の募金により実現したこの改修工事は平成16年の3月には終了し、兼松講堂は新しく蘇ります。平成16年4月に国立大学法人として新しく生まれ変わる一橋大学。再生される兼松講堂は新しい一橋の歩みの証人となってくれることでしょう。

平成15年4月5日、工事をひかえた兼松講堂では、改修工事の募金活動の一環として、チャリティコンサートと講演会が開催されました。講演会では、日本近代建築史の第一人者であり、建築探偵としても知られる東京大学生産技術研究所教授藤森照信先生が講師を務めて下さいました。聴衆はそこで、一橋大学関係者ですら知らなかった兼松講堂の歴史的価値、建築物としての文化的価値を知ることになります。本誌HQでは、講演の抄録を御紹介しながら、読者の皆さまと改めて兼松講堂の知られざる価値について共有したいと思います。



大学建築は、中世ヨーロッパの 修道院から生まれた

兼松講堂がどういう性格の建物で、どういう意味を持っているか、ちょっと大学の講義みたいな感じでお話ししてみたいと思います。

明治初期に創立された大学が、大正初期から昭和初期にかけてつくった記念碑的な建物は、東大の安田講堂にしても、早稲田の大隈講堂にしても、慶應の記念図書館にしても、基本的にはみなゴシック様式で建てられています。ところが、一橋の兼松講堂だけはロマネスク様式なんですね。なぜか。これがひとつ、とても興味深いところです。

世界的に見ると、19世紀末から20世紀初頭にかけて建てられた大学の施設は、ほとんどがロマネスク様式かゴシック様式かのどちらかです。いろんな建築様式があるなかで、大学

がなぜこの2つの様式でまとめられているかといえば、大学は中世ヨーロッパの修道院に起源をもっているからです。修道院から大学が生まれたんですね。建築家がそういう歴史の勉強をして、大学の施設には修道院の建築様式をつかうようになった。その修道院の建築様式が、ロマネスクかゴシックかのどちらかだったのです。

兼松講堂を設計した伊東忠太は オリジンを重んじる学者だった

では、日本ではなぜ、多くの大学がゴシックを選び、一橋だけがロマネスクを選んだか。これは、この兼松講堂を設計した伊東忠太という建築家の特異なキャラクターを抜きにしては考えられません。伊東さんは建築史の専門家なんですが、オリジナルということをすごく重んじた学者で、法隆寺の金堂や回廊の柱がギリシャ神殿のエンタシスから来ているとい



An auditorium where goblins live.

う仮説を立て、それを証明するために3年間をかけてユーラシア大陸を中国からインドをへてギリシャまでロバに乗って踏破するということをしています。見てまわったんですが、結局は証明できなくて、その後は黙っちゃった(笑)。でも、証明する前に主張したことが今なお伝わっていて、修学旅行なんかでは、これはギリシャ建築のエンタシスの柱に起源をもつ世界最古の木造建築で、というような説明を受ける(笑)。

ロマネスクは11~12世紀の建築で、13~14世紀がゴシック、15世紀からがルネサンス様式です。ロマネスクが発展してゴシックになったのですね。それだけに、ロマネスクは、建築様式としては稚拙なところがある。それに対してゴシックは華やかで、洗練されている。ですから、多くの大学はゴシックを選んだ。しかし、オリジナルに対する伊東さんの個人的な思いが、ゴシックのもとになったロマネスクを選ばせたというわけです。

ローマの建物に範を求めた 中世ヨーロッパの修道院

ロマネスクという言葉は、文学の世界ではロマン、つまり物語性というような意味でつかわれていますが、もともとは建築からきた言葉で、11~12世紀につくられた基督教の教会や修道院がローマ風の建築だったということに由来しています。なぜローマ風だったか。ここでちょっと歴史のおさらいをしますと、4世紀初頭にローマ帝国が基督教を受け入れて、基督教の教会をつくりはじめた。ところがそのローマ帝国がゲルマン民族の大移動によって滅ぼされてしまう。このため、6世紀から10世紀にかけては、基督教はイタリアだけのものになって、フランスやドイツからは消えてしまう。ゲルマン民族がもちこんだのは、アニミズム、つまり動物や植物や自然現象を畏れ敬うという土着的な宗教だったんですね。しかし、そのゲルマン民族もだんだんに基督教の影響を受けるようになって、10世紀になると基督教が全ヨーロッパで再生する。再生してどうしたか。どうしたらいいのかわからないから、フランスやドイツやノルウェーからローマに勉強に出かけたんですね。ローマには基督教が残っていたからです。そうして11世紀から12世紀にかけて、ローマをお手本にした教会や修道院がヨーロッパの各地でつくられるようになった。それがローマ風の建築、すなわちロマネスク建築です。

伊東さんは、おそらく、こういうようなことを話して、施主である大学関係者をいいくるめたいのだらうと思います(笑)。しかし、伊東さんがロマネスクに執着したのは、じつはそれ



伊東忠太氏が描く怪物イラスト。
この他にも氏は数多くの
怪物イラストを残している
(資料提供：日本建築学会)



上：正体不明の怪物と植物の彫刻、
大きなアーチがロマネスク建築の特徴（兼松講堂エントランス柱）
下左：ヨーロッパに見られる伝統的なロマネスク様式の装飾
下右：リチャードソン設計によるロマネスク様式の建造物、装飾の怪物は控えめだ

だけじゃなかったのですね。もっと個人的な思い出があった。そこが面白いところで、わたしが興味をひかれるのもそこです。

土着宗教からキリスト教への 移行期にあらわれた建築様式

兼松講堂を正面から見ると、出入口や窓が、連続した半円形のアーチで構成されています。これがロマネスクの大きな特徴のひとつです。ロマネスクはスペイン経由でイスラム文化の影響も受けていましたから、アラベスク模様、つまりアラブ風の模様もまぎれこんでいます。さらに近寄ってみますと、そこかしこに怪物がとりつけられています。人なのか

動物なのか植物なのか、よく分からないものがほとんどです。そういう正体不明の怪物が複雑に絡み合っ、からだの途中からねじれた紐のようなものになってしまう。これがロマネスクのもうひとつの特徴です。絡み合う、繰り返すというのは生命現象の象徴だと思うのですが、では、こういうネコだかライオンだか分からないような怪物のそれぞれがなにを意味しているかということになると、まったく分かりません。

ロマネスクはなぜ、こういう怪物を採り入れたか。ローマ人以前のケルト民族やローマ人以後のゲルマン民族は、キリスト教を受け入れたといっても、それまでの土俗的な宗教を捨てきれなかったんですね。ですから、精霊信仰に由来するいろんな図像をキリスト教会や修道院のなかに組み入れた。しかし、キリスト教としては困るわけですね(笑)。キリスト



An auditorium where goblins live.



上：伊東忠太氏の代表的な作品である
築地本願寺にも、動物が
中上/下：兼松講堂ホール内に住む、
伊東忠太氏オリジナルの怪物
中下：兼松講堂内のランプにも
怪物の装飾が施されている

教というのはとても合理的な宗教で、キリスト教の図像学では、人だか鳥だか獣だか植物だか見分けのつかないような怪獣は、すべて悪魔のシンボルになってしまいます。このため、ゴシック以降、そういう怪獣はどんどん削ぎ落とされていった。そして現在では、それぞれの怪獣がなにを意味しているか、分からなくなってしまった。日本では、神社のヘビやキツネの図像がなにを意味しているか、まだ分かるんですが、ヨーロッパでは、まったく分からなくなってしまっているですね。

怪獣を野に解き放つ 格好の建築様式だった

アメリカのボストンに、ロマネスクのリバイバルを牽引したリチャードソンという建築家が設計した世界的な名建築があります。半円形のアーチが連なる典型的なロマネスク建築なんですが、しかし、この建物には、ロマネスクのもうひとつの特徴である怪獣は、どこにも見当たりません。とりつけられているのは、ちゃんと見分けのつく鳥と獅子、それに聖人像くらいのものです。じつは、これが近代におけるロマネスクなんですね。リチャードソンはもちろん、11~12世紀の修道院や教会建築にはわけの分からない怪獣がいっぱいについていたことを知っていた。知っていて排除した。

しかし、伊東さんは、むしろ怪獣をくっつけるためにロマネスクにしたとっていいくらいに怪獣を組み入れている。伊東さんが設計した数ある建物のなかでも最も知られているのは築地本願寺です。お寺のオリジナルはインドの寺院にあるということで、お寺も困ったろうと思うんですが(笑)、インド風の建物になっています。そしてこの築地本願寺にも、ゾウやサルやウシがちりばめられています。伊東さんは、要するに、こういう動物のような、怪獣のようなものが好きだったのでですね。

伊東さんは幕末に山形県で生まれた人ですが、当時の山形には、座敷わらしとか、精霊信仰のようなものが生き残っていて、そういう古い伝統のなかで育ったということもあるのでしょう、子どものころから怪獣が好きで、学者になってからも、毎日のように怪獣の絵を描いているんですね。生涯にわたって描きつづけている。たんに好きだということではない(笑)。そういう伊東さんが、大学の建物を設計することになって、よしっ、ここはひとつ、怪獣をやってやろうと(笑)、おそらくそういうことだったのだと思うんです。

その証拠にといつていいかどうか、この兼松講堂では、外側の装飾にはヨーロッパに起源をもつ怪獣をつけているんですが、中に入ると、伊東さんのオリジナルの怪獣が満ちあ

ふれています。伊東さんが毎日のように描いていた怪獣の絵がかたちになっている。19世紀、20世紀におけるロマネスクのリバイバルのなかで、こういうことをやったのは伊東さんくらいのもので。

ヨーロッパの近代文明が排除した エコロジカルな思考が今も息づく建物

建築というのは、ロマネスクのルールはこうで、アーチの断面のつくり方はこうでというところから入っていくと、たいへん面倒なことになるんですが、怪獣のようなものからならだれでも近づくことができる。つまり、建築のシンボルというのは、ふつうの人と建築をつなぐ力をもっているんですね。そのシンボルとして、怪獣が適切かどうかは別ですが(笑)、建築にはそういうところがある。余談になりますが、わたしは自分の家の屋根や壁一面にタンポポを植えました。その効果というべきか、ご近所ではすっかり有名になって、娘はいやがっているのですが、娘の友だちは喜んで遊びにきてくれます(笑)。

もうひとつ、最後に辻褄をあわせるようなことをいえば、ヨーロッパ文明のなかでは排除されてしまったもの、動物や植物や人間が渾然と絡み合った精霊信仰的なものというのは、今の時代に求められているエコロジカルな考え方、要素に分割するのではない考え方にもつながっています。兼松講堂の見方には、そういう見方もあるということを経験の言葉として、わたしの今日の“講義”を終わります(拍手)。

◆藤森照信氏プロフィール

1946年長野県生まれ。1978年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。現在東京大学生産技術研究所教授。日本近代建築史の専門家として、さらには建築探偵団のリーダーとして活躍。兼松講堂を設計した伊東忠太の研究者としても知られる。1998年『日本近代の建築・都市の研究』により日本建築学会賞を受賞。今回の講演に関連する著書として『伊東忠太動物園』(筑摩書房・1995年)、『タンポポ・ハウスのできるまで』(朝日新聞社・1999年)など。



兼松講堂「改修工事」 支援募金のお願い

国立キャンパスでは現在、兼松講堂の改修工事がすすんでいます。工期は今年4月上旬から来年3月上旬まで。03年度の入学式と卒業式の間隙をぬっての突貫工事です。工費は7億5000万円。全額をOB・OGの方々の筆頭に、一橋大学関係者からの寄付金によってまかなうことにしています。

このたびの改修は、この建物の創建当初の姿を忠実に復元しつつ、機能・設備の近代化をはかり、多目的につかえる講堂として21世紀によみがえらせようというものです。それは、国立大学法人化の動きを見据えて抜本的な大学改革に取り組んでいる一橋大学の現在の姿にもかさなるといいでしょう。

皆様方にあらためて改修支援のご寄付をお願いしたいと思います。

あなたの兼松講堂の思い出を 募集いたします。

今後一橋大学広報誌「HQ」では、兼松講堂についての連載を計画しており、その中で兼松講堂にまつわる思い出やエピソードを紹介したいと考えています。つきましては、読者の皆様からの情報提供を広く募集しております。記事として掲載させていただく場合には、本誌専属の記者およびカメラマンが皆様のもとにお邪魔し、レポート記事として作成いたします。写真やコンサート、講演会のプログラム等の御提供も歓迎致します。官製はがき、封書にて氏名、住所、連絡先、簡単な思い出の内容をご記入の上、ご応募下さい。

●応募先住所

〒186-8601 国立市中2-1

一橋大学総務部企画室企画広報「兼松の思い出」係

本誌HQの創刊と連動して、兼松講堂を 紹介するウェブサイトができました。

ウェブサイトでは、本稿でも取り上げられた兼松講堂の文化財としての価値をご紹介するとともに、皆さんから寄せられた思い出やエピソードをもとに、兼松講堂を通して蓄積されてきた一橋大学の記憶を集めていこうと思います。ヴァーチャル・ウェブ・ツアー

では、兼松の怪物たちの詳しいご紹介をしておりますので、是非一度御閲覧下さい。

兼松講堂の思い出募集は、ウェブサイト上でも行っておりますので、そちらにもふるってご投稿をお願いします。

